

実施の効果

1. 効果の検証方法

私たちが人間関係学科の実施において大切にしてきたことは、子どもたちの「気づき」と「ふりかえり」であり、その「わかちあい」を通じ子どもたちの成長を確認してきた。毎回の人間関係学科の授業後に子どもたちが書いた「ふりかえりシート」から、子どもたちの「気づき」をひろいあげ、「わかちあい」として子どもたちの中に共有化してきた。また、授業そのものに対しての子どもたちの評価をデータ集積し、授業の内容創造や子どもたちの状況分析に活用している。

また、各学期末には学校生活調査・学校生活アンケートを実施し、子どもたちの状況や学校生活にどのような変化があらわれているかを確認している。

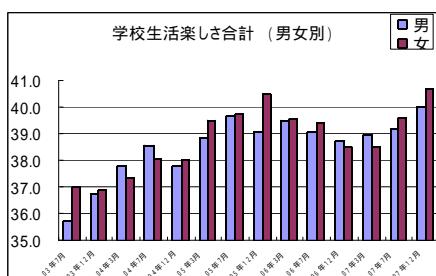
今回の効果の検証においては、学校生活調査・学校生活アンケート、学校教育自己診断などの調査結果をもとに、子どもたちの変化から効果を検証するとともに、子どもたちの集団という意味でのそれぞれの学年という観点で見た効果を検証していきたい。

2. 子どもの変化

1) 松原第七中学校

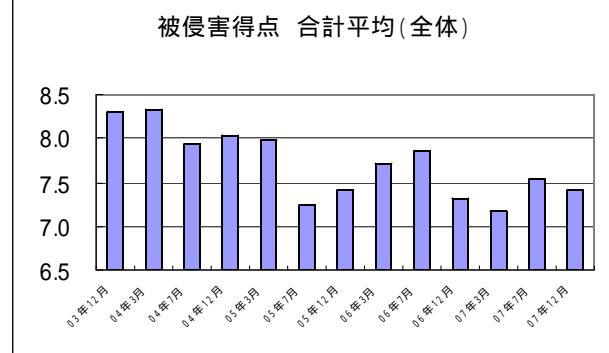
いじめに関連する項目から見えること

2003年度から2007年度まで、楽しさ合計は年々増え続け、調査開始から昨年12月までの間、およそ5ポイントの上昇を見せている。男女別に分けて見ていっても昨年度の落ち込みはあるものの、昨年12月の調査が男女ともこれまでの最高値となっており、順調に上昇していると言える。

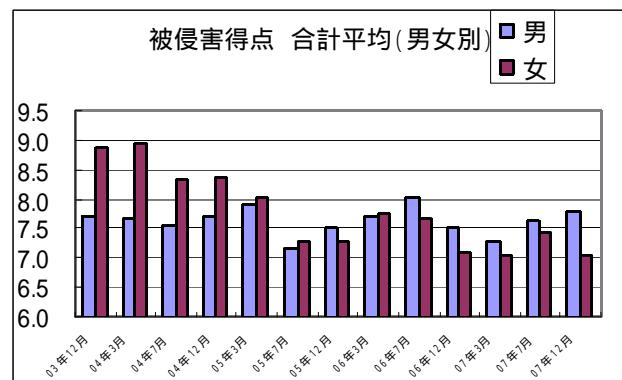


学校生活調査の中の、

- b4 無視される
- b5 いやなことを言われる（される）
- b6 仲間はずれにされる
- e17 人からの陰口、うわさ話をされること

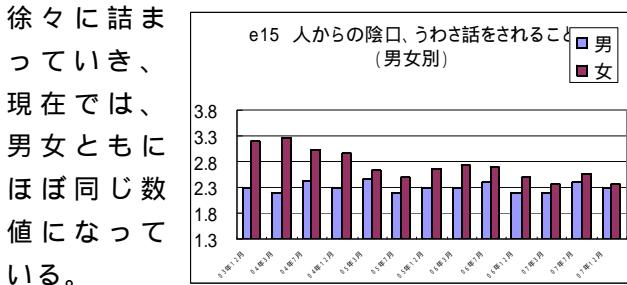


の4つの項目を拾い出し、合計点を被侵害得点として、2003年度からの経緯を見ると、本年度まで順調に減少していることがわかる。生徒指導部会や学年会議の中での事例検討を通じても、本年度は、突発的・単発的な事例は発生しているが、継続的・深刻的な事例には至っていない。ケンカや暴力事件の減少にも現れているように、人間関係学科(HRS)の成果として、これら4項目に



おける変化があると思われる。

しかし、これを男女別のデータに分けてみると、男女別の変化に大きな違いがあることがわかった。2005年を境にして、男子と女子の数値が逆転しているということである。女子は2003年度から、およそ順調に2ポイント減少しているのに対し、男子の変化は最大0.7ポイントの間で上下しているということである。これが顕著にあらわしている項目が悩みを計る項目の中にある「e15 人からの陰口、うわさ話をされること」の変化である。最大1ポイントあった男女の差が徐々に詰ま

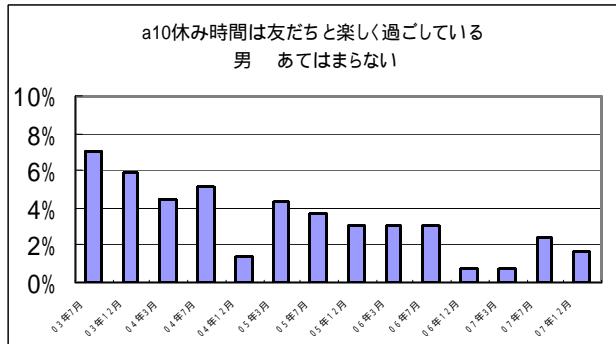
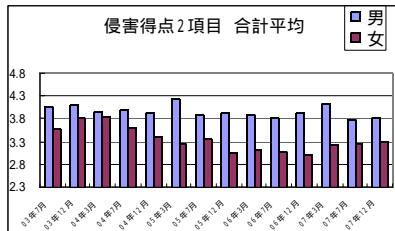


つていき、現在では、男女ともにほぼ同じ数値になってきている。

そして、学校生活調査のストレス対処の項目の中にある

- d6 人が嫌がることを言う
- d7 人をたたく

という項目を合計して、侵害得点と位置づけてみた。するところも、女子の減少に対して、横ばい状態であることがわかる。

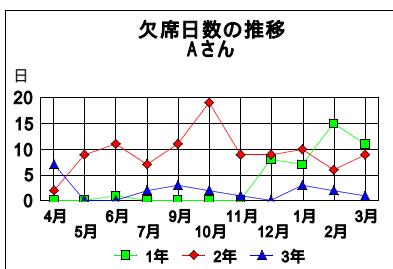


しかし、a10 の項目「休み時間は友だちと楽しく過ごしている」の「あてはまらない」の解答を見ると、順調に減少し、男子における仲間の関係性は強まっていることがわかる。

いじめ予防に関わる有効なスキルは、自己認識と共感性であると言われている。七中では様々な自己開示のワークを実施し、自己認識と自己肯定感の育成を進めてきた。一方、いじめにおける事例に直面した時、子どもたちに「人の気持ちがわかるのか？」という問いかけを継続して行ってきた。つまり、「共感性 = 人の気持ちを想像できる」という力をさらに育てていくプログラムの開発が要求されている。

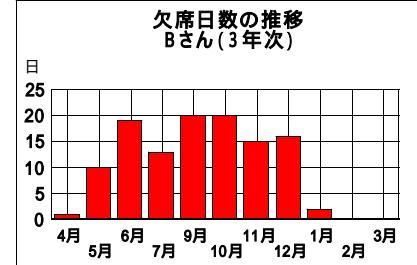
不登校からの復帰

生徒 A (現高校 1 年)



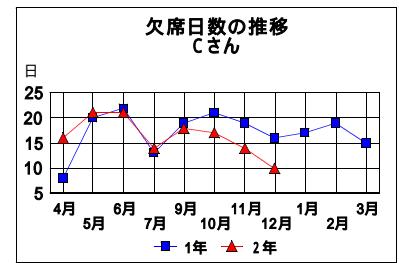
非掲載

生徒 B (現高校 1 年)



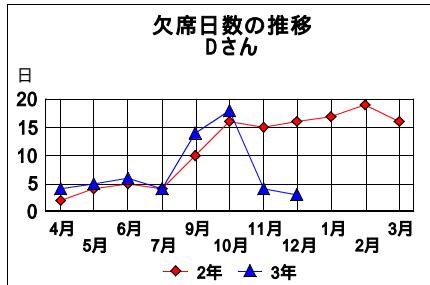
非掲載

生徒 C (現 2 年)



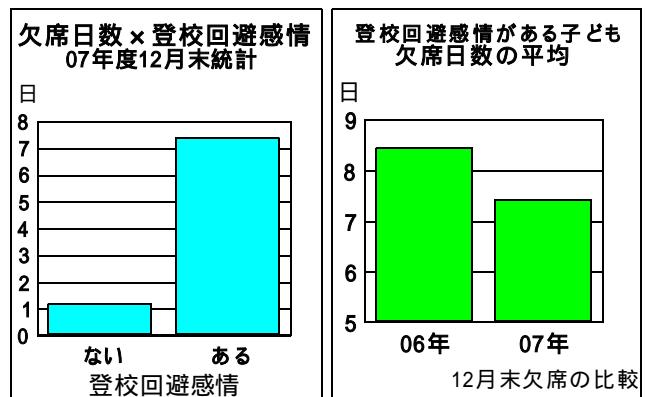
非掲載

生徒 D (現 3 年)

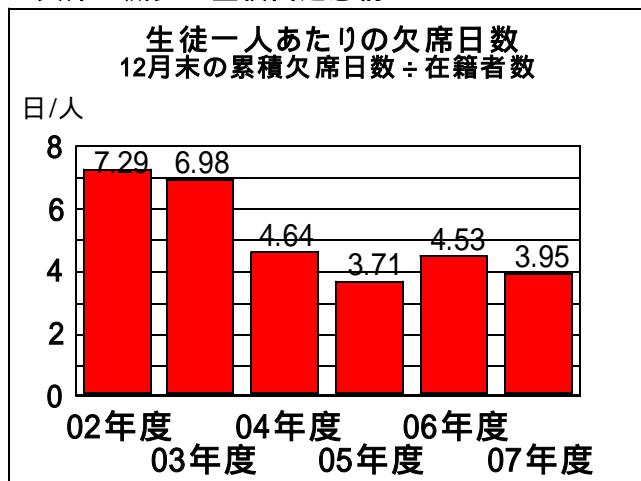


非掲載

全体の約20%の子どもが7月と12月の学校生活調査のいずれかの調査で登校回避感情を示している。「登校回避感情がある」群の子どもは、実際に欠席するという行動を起こすことが分かる。

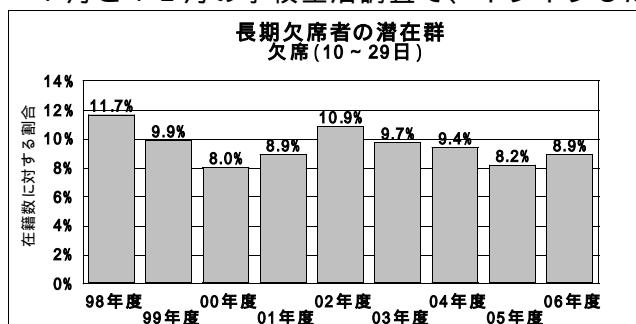


欠席の減少と登校回避感情



学校全体として、「学校を休む」子どもが減少してきた。各年度の12月末の欠席日数の平均値を比較すると、下の表のようになる。また、年間30日未満であるが、10日～29日欠席する子どもは、全体の8%台に減ってきてている。

7月と12月の学校生活調査で、イライラした



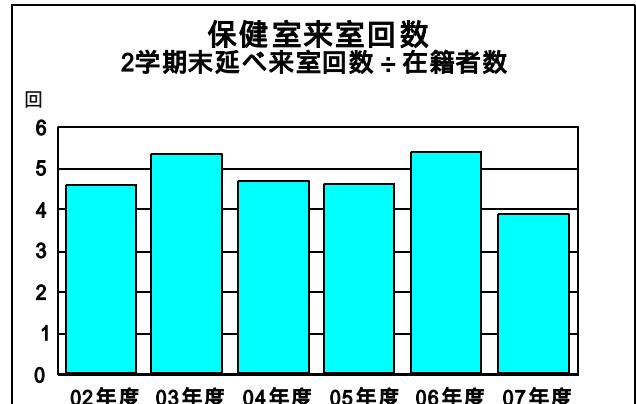
とき「学校を休む」という質問に「あてはまる、どちらでもない」と回答した子どもの群を「登校回避感情がある」として欠席と遅刻を比較した。

登校回避感情

		12月調査		
		ない	ある	合計
月	ない	206	21	227
	ある	17	6	23
	合計	223	27	250

保健室来室者の減少

本校では、「保健室は人間関係づくりが苦手な子どもを受容しエンパワーする場所として、大切な役割を持っている」と考えている。



その視点から、保健室への来室状況を同時期でみると、過去6年間で最も低い数値を示している。言いかえれば、学校全体として「元気」な子どもが増えていると考えることができる。

しかし、一方で延べ30回以上来室している子どもがいる。

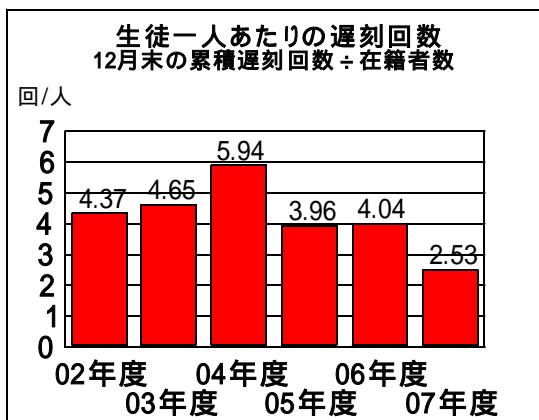
不登校生等支援会議や生徒指導部会で、毎月の保健室来室状況を養護教諭が報告している。その状況を、学年に知らせ子どもの日々の様子を把握する体制が取られている。

遅刻の減少

「遅刻」の集計を毎月行っている。これは、子ども支援コーディネーターが、各学級担任に出席管理シート（表計算ソフト）を配布し、集計した結果を生指部会・職員会議で共有している。もちろん、実数だけでなく具体的な子どもの数値を示している。過去においては、大幅遅刻をする子どもも若干あったが、本年度は5分程度の遅刻になっている。

各学年では、朝の学活で連絡のないまま登校していない子どもの家庭に、副担任が必ず電話をかけて、状況を把握している。

「教室に子どもがいない」ということに対して機敏に対応することが日常的になっている。子ど



もは、「教室にいないことは、先生が心配するんだ」ということ意識する。一人ひとりの子どもに、自分はなくてはならない存在なのだという気づきを促す教師の活動である。

支援体制に見られる成果

研究開発学校2005年の最終報告書でも記述したが、不登校生を担任まかせにしない。これが本校の不登校生支援の大前提である。複数のパイプをつくり、保護者とのつながりをきずき、不登校生を支援するネットワークをつくろうと取組を進めてきた。

2003年度から連携した機関は、

富田林子ども家庭センター
富田林少年サポートセンター
育成支援室
医療機関
松原市子育て支援課
松原市障害福祉課
松原市不登校児童生徒総合支援会議
松原市教育支援センター
松原警察少年係
自立支援施設

などである。もちろん校区の小学校との連携は、

不登校にかかわる会議をもつなど、さらに一步前進した。また、必要ならば小学校の教員の参加を得たケース会議や近隣中学校との生徒指導連絡会を開いた。

学校だけでは解決できない不登校の課題を、さまざまな機関と連携し、子どもを中心としたネットワークができつつあることで、不登校への支援も進んできている。

その結果、不登校生だけでなく、欠席がちな子どもたちやメンタルサポートが必要な子どもたちに対する支援についても教員の意識が高まり、不登校率が減少するという成果につながってきた。

1年生

a) ~中学校入学！新しい自分に出会おう！~

・「わたしのジャガイモ」

初対面の人もいたけど、ジャガイモがあったから、普通に話せてよかった

b) ~新しい仲間との関係をつくろう~

・「さいころトーキング」

みんなのことを知ることができ、自分のことも聞いてもらえてすごくよかった。

・「こんなときどうした？」

また一歩クラスの子のことが分かったような気がする。

・「なんでもキャッチ」

受け取りやすいように相手のことを考えた言葉をこれから投げるようにしたい。

・「流れ星」

コミュニケーションは一方通行では駄目だ。ちゃんと伝え合わないといけない。

・「アニメの村」

「協力するって楽しい！」と感じた。

c) ~仲間との関係について考えよう~

・言葉を使わない「通じてねゲーム」

相手の言いたいことが何かを真剣に聞くことの大切さが分かった。

・「新聞ジグソー」

みんなで協力して一つの事をやるのって、めっちゃいいな～と思った。

・「すごろくトーキング」

みんな自分のことを言ってくれて嬉しかった。自分のことをためらわずに言える「雰囲気」があったから言いやすかった。

・「ふわふわ＆トゲトゲ」

自分の思っていた『言われたら嫌な言葉』をみんなに言って良かった。

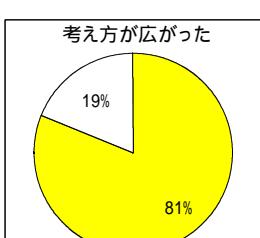
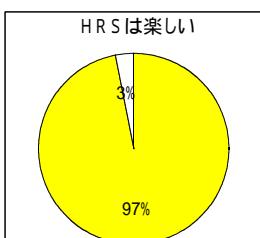
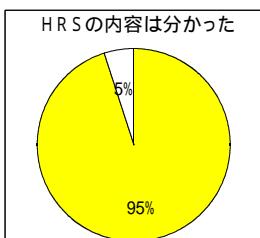
・「伝言ゲーム：それってホンマ」

うわさとよく似ていた。本当かどうか分からぬることでつながるのはやめたい。

d) ~ストレスに気づきストレスを

マネジメントしよう~

- ・ストレスチェックで自分にどれくらいのストレスがあったのか知れてよかったです。
- ・「ストレスのメカニズム」は難しかったけど、ストレッサーには色々なものがあるし、ストレス発生の流れを知れてよかったです。
- ・「ストレスゲーム」はめっちゃおもしろかったです。普段簡単に出来ることもプレッシャーがあるだけで出来なくなることが分かった。
- ・「ストレスをコーピングしよう」を学習するまで僕はストレスを強めるコーピングしかしてなかつたと分かった。
- ・「先生たちのアサーション劇」を見て、アサーションってめっちゃいい方法やと思った。僕は意見を言えないパターンになってたけらアサーションの方法を使っていけるようになりたい。
- ・「アサーショントレーニング」で、友達のロールプレイを見て『こんな風に言えばいいんや』とかいろいろ思った。
- ・アサーション使ったら、相手も自分も良い気持ちになるから知って良かった。

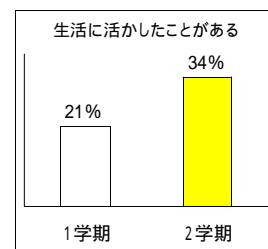


今年の1年生は、小学校の頃から中学校の出前授業や体験授業で人間関係学科を体験していたことから、人間関係学科にたいする期待度が非常に高かったです。これは、2学期末に実施したアンケートの結果である。人間関係学科の授業は楽しく、よく分かると答えている子どもが90%以上と非常に多い。

また、人間関係学科の授業を通して、「今まで気が付かなかつたことを学んだ」「考え方方が広がつた」と答えている子どもたちも多い。

「生活にいかしたことがある」という項目に関しても、1学期より2学期は増加し、1年生でも意

識して普段の生活にいかした子どもたちが増えてきている。



2年生

a) ~新しい学年のはじまり

コミュニケーション法を学ぼう~

- ・カードトーキングで自分のことを言って、はじめはちょっと恥ずかしかつたけど、今はなんかスッキリした感じ
- ・心臓がドクドク。でも、うまくできたからよかったです。
- ・ちがうクラスだった人のこともっと知りたい。
- ・自分はちゃんと聞いているつもりでも聞き逃してるのがあるんだな、と思いました。
- ・質問をしないで一方的な情報だけでものごとを整理するのはむずかしい。

b) ~人とのつながりを深め、

物事を解決しよう~

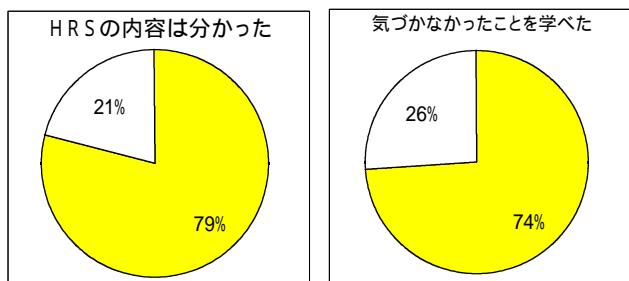
- ・言い方でその後どうなるかがわかるんだな。
- ・友だちがロールプレイをしたとき、「この言い方が似合う」とかがあって、やっぱり知らないうちにイメージがついてるんやなと思った。
- ・攻撃的に言うと、ケンカになる。何も言わないままだと、二人の間に上下関係ができる。アサーティブな言い方だと、相手も納得するし、自分も言いたいことが言えていた。
- ・自分勝手なことをすると、みんなが迷惑するから、あかんということがわかつた。
- ・みんなで1つのことをするには、声をかけたりするのが大切だと思った。一人だけ力をだしてひっぱってもだめなんだ。
- ・1人でもみんなのことを思ってくれたら、その状況が変わっていくことが分かつた。
- ・自己主張も良いけど他の人の話もきかなあかん
- ・自分が言つたら相手が「そうなんや」とか言つてくれて、何か「そうなんや」って言われた方がいいと思った。
- ・今日のみんなは結構笑っていた。

c) ~職場体験と結んだプログラム 社会に通用するスキル・マナーを身につけよう!~

- ・自分の態度で相手の態度も変わるんだ。
- ・お礼を言うこととか謝ることは大切と思った。

- ・他人に思いを伝えるには、態度や表情がとても大事だということがわかった。
- ・ふだんは「ムカつく！」（攻撃する）パターンだけど、これから「ムカつくけど…」（アサーション）のパターンもやってみようかな。
- ・私は、弟に対しては、自分の感情をそのままぶつけて、でも、スッキリしないまま終わることが多い。他の人に対しては、一応落ち着いて言えるのに、何で弟に対してはそれができないのか？と考えた授業だった。
- ・いつものケンカに、とてもよく似ていたので勉強になった。いちいちキレたら、もっとこんがらがってムカつくことになるから、次は、理性で保って、プラスの方向にもっていきたい。

思春期に入り、積極的にワークに取り組むことがむずかしいこともあった2年生であるが、下のグラフに見られるように、理解度は高い。個々の気づきや学びは多様であろうが、子どもたちの内面では何か新しい視点がうまれていたのだろうと考えられる。



2年生の人間関係学科では、初めて社会に出て働く「職場体験」が控えていることもあり、効果的コミュニケーション・スキルと、感情のコントロールを中心に学習する。そのため、ワークでは、「ただ楽しむ」のではなく、自分の行動・言動を客観化してみる機会を多く持った。その中で、「こんな言い方をしたらいいんだな」「本当に自分の気持ちを伝えて、トラブルにならないためには、表情や態度に気を付けよう」という気づきを、ふりかえりシートに書いた子どもが沢山いた。また、職場の方からのシミュレーション学習で、事業所の方がそれを現実と結びつけてお話くださったことも効果的であった。

一方で、仲間関係を深めるワークでは、推理をしたり、体を動かすゲームに人気があった。「一緒に楽しめた」「みんなが笑った」ことを特筆する子が多くいる。普段はあまり話さない子どもワークがあれば話せるし、笑える。そんな一体感を味わうことが、彼らにとって貴重な体験となり、それが心地よい感情として残る。対人関係への自

信がもてない子の多い学年であるが、このようなワークを重ね、少しずつ自然に自分を出せるようになってほしいと願っている。

ただ、HRSでの学習を「生活に生かした」と答えた子が30%弱と低いため、学習材や指導法を工夫するとともに、丁寧なふりかえりをさせることが今後の課題である。

3年生

a) ~中学校最後の年のはじまり！

新しい自分に出会おう！~

- ・今年は勉強とクラスのみんなを大切にして、自分の決めた進路にいけるようにがんばりたい。
- ・スキー合宿で深まった関係を、今年ももっと深められるようにがんばる。
- ・みんなで団結できて、毎日笑顔で、本音を言い合えるクラスにしたい！

b) ~修学旅行直前 仲間と分かち合う

大切さを学ぼう！~

- ・単純な作業も、みんなでやる方がおもしろい！
- ・「人文字大作戦」で、いつの間にかみんなで一生懸命になっていた。
- ・「名画ジグソー」で、班みんなで協力すると楽しいってことがわかった。力を合わせれば何でもできる！

c) ~修学旅行を終えて

仲間と力を合わせる方法を学ぼう！~

- ・「トラスト」で、友だちを信用するっていいことやと思った。
- ・「しりとり大作戦」で、相手のことを考えて描かないと、伝わらなかった。
- ・「線」で、自分で気づかぬうちに、けっこう相手への侵略をしていたことがわかった。
- ・人それぞれの考え方があって、イヤなこと、うれしいことも、それぞれ違って、人を理解するのってすごく難しいし、奥が深いなって思った。

d) ~職業調査にむけて

社会に通用するスキルを身につけよう~

- ・「アポの取り方」で、相手に失礼がないように、きちんと話さないといけないと思った。
- ・自分の対応のしかたによって、相手の対応も変わるんだなって思った。

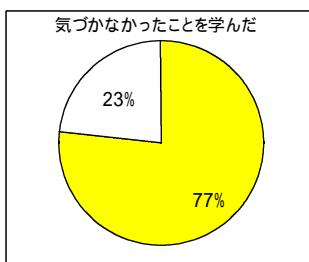
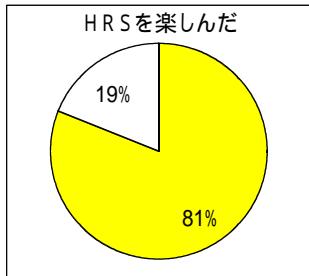
e) ~ステップ・アップ・マナー~

- ・自分のことを相手に伝えるのは、とても勇氣のいること。でも、それを乗り越えてがんばることも大切だと思った。
- ・自分に自信を持つために、今できることはたくさんあるということがわかった。

・気持ちにゆとりを持つことは大切なと思った。

f) ~進路決定に向けて 積極的な考え方を手に入れよう！~

- ・見方を変えることで、自分自身が気づかなかつたことも気づくことができるんだと思った。
- ・長所を見つけるのは難しい。だけど、短所から考えると、長所を見つけることができるなって思った。
- ・自分よりまわりのみんなの方が、自分の長所を知ってくれていて、うれしかった。



これは、2学期のまとめとして行ったアンケートの結果である。HRSについて、「楽しかった」「内容は分かった」「気づかなかつたことを学んだ」と感じた子どもたちが非常に多い。中学卒業後の進路決定をひかえた3年生にとって、プレッシャーを弱めながらも、考えを深めることができたようである。

また、「生活への関係度」も、1学期の52%から2学期は80%に上昇していた。2学期に、しんろ学習と結んだプログラムをすることで、HRSを楽しみながらも、進路決定に向けての意識向上につながっていたようである。

さらに、毎時間の『ふりかえリシート』における「楽しさ度」「分かった度」「生活への関係度」の相関関係を調べると、『ロールプレイ』の有効性を見て取ることができた。『ロールプレイ』は、それぞれの数値が高いのに、それ以外のワークとの相関が非常に弱く、いろんな子どもたちにとって考える機会となっていたようである。

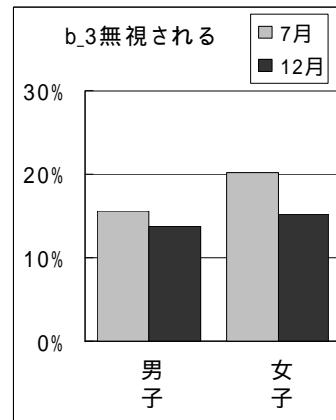
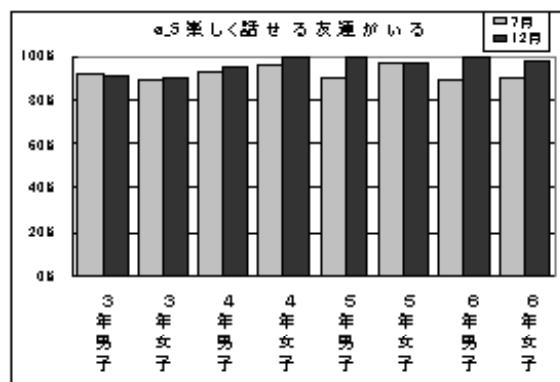
2) 恵我小学校

学校生活アンケートから

a) 子どもどうしの関係

恵我小でも、7月と12月に「学校生活アンケ

ート」を実施した。

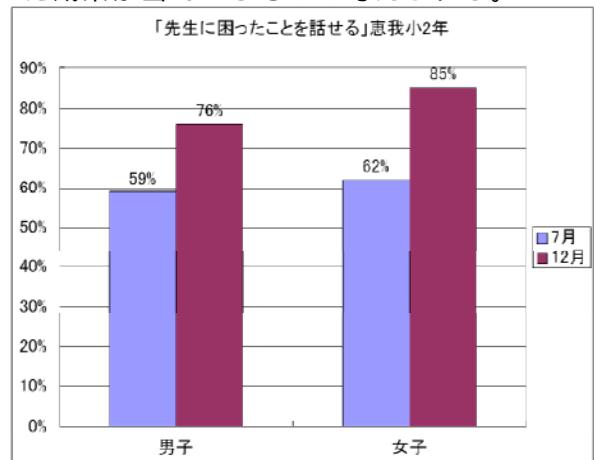


上のグラフは、「楽しく話せる友達がいる」と答えた児童の割合を表したグラフである。このグラフを見ると、概ねどの学年でも、楽しく話せる友達が増えていくことがわかる。左のグラフの「無視される」という項目は、学校全体で減っている。上の二つのグラフから、良好な関係が築けている様子がうかがえる。

b) 教師と子どもの関係

次のグラフは、2年生で「先生に困ったことを話せる」と答えた児童の割合である。1学期の7月には、60%前後であったのが、12月には80%前後にまで増加した。

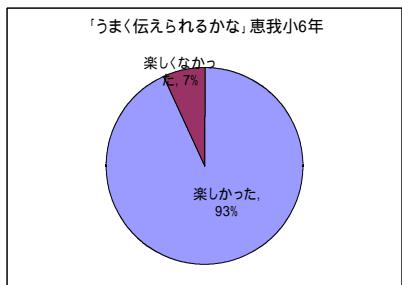
「あいあいタイム」の授業を通して、教師が児童への接し方を考え、児童との関係性に注意を払った成果が出ているものと考えられる。



また、「あいあいタイム」の授業だけでなく、日常の児童の実態把握や指導・声かけ、そして、学級づくりを重視していた点も大事なことである。

「あいあいタイム」の授業を通して

「あいあいタイム」の授業では、1時間の授業の最後に必ず「ふりかえりシート」を書かせた。どの学年も「授業が楽しかった」という質問に対しては、80%～90%の児童が「楽しかった」



と答えており、「あいあいタイム」の授業に興味を抱いて、授業に取り組んでいる姿が見えてくる。

また、この「あいあいタイム」の授業に関しては、1年間の中で授業参観の際に保護者に公開をした。

「あいあいタイム」の取組には期待を寄せていただいている保護者も多い。さらに、今の子ども達に足りない人間関係の調整力などの力を高めていき、家庭でも「あいあいタイム」で学ぶようなことを大切にしていくかなければならないと感じている保護者も多い。今後も、保護者への啓発を促し、共通認識をもって、家庭とも連携をとりながら「あいあいタイム」の取組を進めていかなければならない。

a) 1年生 「ともだちのことをしろう」

【感想】

- みんなでいっぱいぴったんこできてうれしかった。じゃんけんだけたけどたのしかった。またしたかったよ。
- いっぱいともだちをあつめてうれしかった。
- あいあいたいむ、むずかしそうだとおもったけど、たのしかった。
- ともだちにさそってもらえてよかったです。
- あいあいたいむではいろいろなこがいっしょになれてうれしかった。
- ともだちとさそいあいできそうな気がしました。
- ともだちとすきなたべものがいっしょだし、すきなべんきょうもいっしょだからびっくりした。

1年生の1学期は、「ともだちのことをしろう」という目標で取り組んだ。取組の中では、友達と共通点をみつけられたことや、友達に遊びに誘ってもらうことが楽しかったようである。

このパッケージを終え、子どもたちは、「あい

あいタイム」をとても楽しみにするようになった。

b) 2年生 「話し上手 聞き上手になろう」

【感想】

・きょうは、いつもより大きくな声が出たと思います。

・見ためはいやだ ったけど、やってみてたのしかったです。またやりたいです。

・さいしょはきんちょうしたけど、あとで、もっとやりたくなりました。さいごは楽しくできたからうれしかったです。

・みんながやっているのを見て、みんな大きなこえをだしてるって気づきました。みんな「すごいなあ。」とおもいました。

1学期のパッケージは、聴く力・話す力を持つ目的で行った。はじめ「わたしは声がでなかつた」と書いていた子も、大きな声ではっきり話せる子が出てきた。

パッケージの中で扱われるワークになかなか溶け込めない子も、回を重ねるごとに「たのしかった」と言えるようになり、クラスとしての一体感がワークを通してつちかわれていると実感できた。

c) 3年生 「怒りをよく知ろう」

【感想】

・Aは思うことができない時、すごくおこっているなんてわからなかつたので、今日の「あいあいタイム」は、すごく大切な時間でした。また、「あいあいタイム」をして、友だちのことをもっとわかっていき、友じょうを深めたいです。

・1人1人がおもっていることを話してくれたので、とてもよくわかりました。

・ぼくは、あまりおこらないことでも、みんなはとてもおこっているそうです、自分とちがう人がどれだけおこるかがわかりました。

・わたしは、Bのいかりがよくわかりました。いつもぜんぜんしゃべらないけど、よくわかりました。はじめはみんなの気もちなんてぜんぜんわからなかつたけど、今日のことをとおしてよくわかりました。

今までにも友達のことについて色々と知ろうとしてきたが、このパッケージのように目には見えない気持ちを知ろうとすることが、子どもたちにとってはとても新鮮であったようだ。今まで気づかなかつたことに気づき、気持ちをわかりあう心地よさみたいなものを感じていた子どももすくな

くなかった。特に、同じ場面でも人によって気持ちが違うということに気づいた子どもが多かった。

d) 4年生 「友だちと協力してがんばりきろう」 【感想】

- ・みんなで協力してやつたら、色々な工夫が思いつくなあと思いました。
- ・「あいあいタイム」は、とても楽しいです。みんな協力して仲良くなれると思います。
- ・荷物をみんなで詰め込むのは、班で協力しないとできないことがわかった。しかも楽しかった。
- ・みんなで協力したり、話し合ったりすると仲良くできるし、おもしろいし、がんばろうと思うし、またがんばろうと思った。
- ・みんないろいろな考えをもつてるんだなあと思った。

「あいあいタイム」が楽しいと感じることができた。このパッケージを通して、協力することの必要性を理解し、協力することを少しは意識するようになった児童が出てきた。

e) 5年生 「わたし発見！ 友だち発見！」

【感想】

- ・友達のことが色々わかりました。また友達のことを色々知りたいです。
- ・みんなの生活の仕方がわかつたし、自分の生活もふり返れた。
- ・色々な意見があった。同じ意見でも理由はちがうんだなと思いました。

5年生では、友達のことをより客観的に見れるようになっている姿がうかがえる。色々な意見から、その人なりの考え方や生活に思いをめぐらす子どもが出てきている。低・中学年に比べて、より深いつながりができるようになるのではと考えられる。本パッケージのように、自分の意見をしっかりもち、それを大切にする。同時に友達の意見を聞き、肯定的に自分と比べるといったワークに取り組むことでさらなるつながりを築いていきたい。

f) 6年生 「うまく伝えられるかな？」

【感想】

- ・相手に何か伝える時は、つたえやすく伝えることが大切なんだなあと思った。伝えられた時も、ちゃんと聞くことが大切なんだと思った。
- ・思っていることをそのまま言っても伝わらない時があるんだなあって思いました。言い方を気

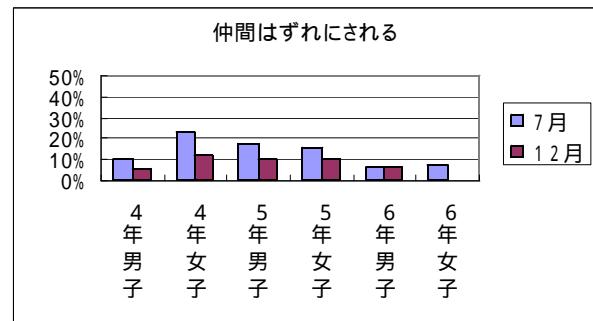
をつけようと思った。

自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞いたりすることの大切さを学んだ。言葉で伝えることの難しさを感じとり、相手に気持ちを伝える時には、ていねいに言葉を選び、ゆっくりと伝えなければならないことに気づいていた。

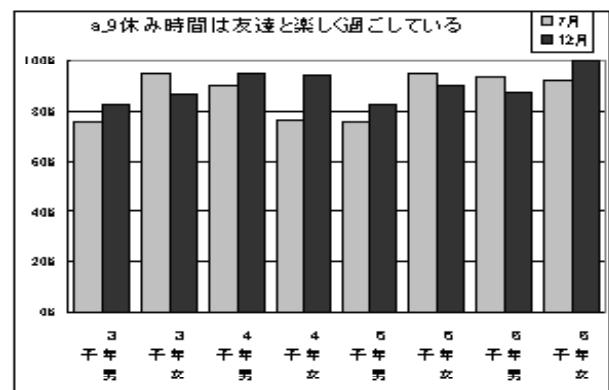
3) 恵我南小学校

学校生活アンケートから

a) 子どもどうしの関係



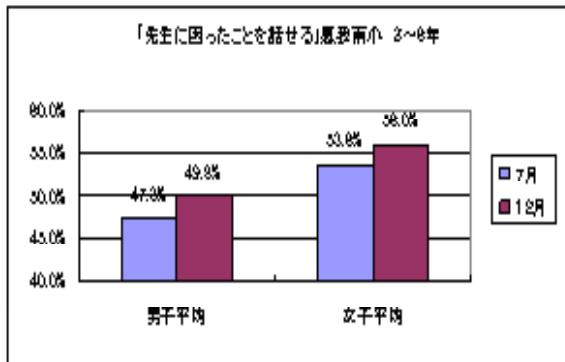
特に、「仲間はずれにされる」という項目では学校全体で大幅に減少していることがわかる。



このグラフは、「休み時間は友だちと楽しく過ごしている」と答えてる児童の割合である。7月から12月を比較すると、12月はどの学年も80%を超えていて、おおむね増加の傾向にあることがわかる。

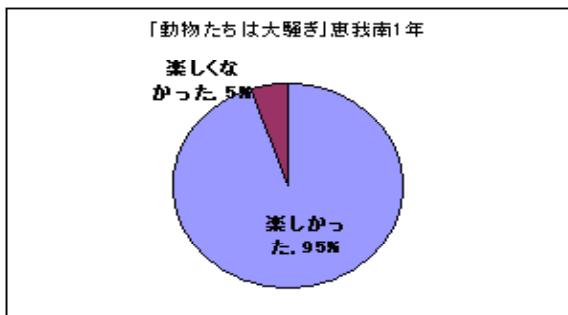
上の二つのグラフから、子どもどうしの関係は良い方向に向かっていると思われる。しかし、少しではあるが仲間関係でうまくいっていないと回答した児童もあり、今後もその児童に眼を向け、人間関係を深める取組を進めていきたい。

b)教師と子どもの関係



このグラフは「先生に困ったことを話せる」と答えた全学年の児童の平均値である。「あいあいタイム」を通して教職員が子どもへの関わり方を学び教職員と子どもの関係が近づいていることがわかる。

「あいあいタイム」の授業を通して ～各学年のふり返りシートから～



「あいあいタイム」の授業への子どもの反応は、例えば 1 年生の「動物たちは大騒ぎ」のワークでは、90 % 以上が「楽しかった」と回答している。小学校においては、取組初年度ということもあり、まず、子どもたちにとって「あいあいタイムの授業が楽しい」と思えるような授業づくりに取り組んできたことの成果であるといえる。

次に、各学年のふり返りシートから、具体的な感想や「気づき」を紹介する。また、プログラムを実施した後、何が効果的だったのかを知るために、各学年でまとめをしている。

a) 1年生 「動物たちは大きわぎ」

【感想】

- ・おともだちができたよ。
- ・なまえをなんにんもおぼえたよ。
- ・さいしょはひとりだったけど、すぐにあつまれて、うれしかったよ。おもしろかったよ。
- ・さいしょはみつけられなかったけど、あとでみつけてくれたから、うれしかった。
- ・なかなかかまをみつけることができなかつたけど、ルールをまもれてたのしかったよ。

子どもたちの日々の生活の中で、あいあいタイムで学んだ言葉が出てくるようになった。朝の会や終わりの会では、今どんな気持ちのカードを使って、自分たちの気持ちを表現できるようになってきている。聞く側も友だちの気持ちに关心を持つようになった。心のノートを使った「あいさつをしよう」の振り返りの場面では、あいあいタイムで学んだスキル「大きな声で伝える、相手を見る、笑顔でいう」をしっかり思い出すことができた。

b) 2年生 「I (アイ) 相 (アイ) 見い ~ つけた」

【感想】

- ・前よりいっぱい友達のいいところをみつけられた。
- ・けんかをしないで、楽しくできた。
- ・「みんな（自分の名前を呼んで）こっちやで」と言ってくれてうれしかった。
- ・（友達が）いろいろなことを教えてくれた。
- ・同じシールをさがすとき教えてもらって、最初はむずかしかったけど、二回目は自信がもてました。
- ・次はもっとともだちのいいところをみつける。
- ・ぼくがともだちにやさしくするぞ。

友だちの優しさを感じた子が多くいた。友だちが自分と同じシールを見つけてくれたり、同じグループのところに連れて行ってくれたりする場面が多く見られ、とてもうれしそうだった。ジェスチャーや顔の表情で伝えることを自分で工夫し、相手に思いを一生懸命伝えようとしていた。

c) 3年生 「後ろ姿で私がわかる」

【感想】

- ・とてもたのしかったです。もっともっと友だちの事を知りたいです。
- ・初めてやってみたら、後ろ姿だったから分かるかなあと思ったけど、だいたいわかった。
- ・友だちのことをいっぱい考えたから、分かった。
- ・友だちのことをよく知ろうと思った。
- ・しっかり話を聞いた。
- ・いろんな人の名前がわかったから、自分でもがんばったと思う。

クラスの人数が多いので、箱から出したり、ヒントを先に言ってから、写真を出すなど工夫したので、比較的最後まで誰が出てくるのか楽しみにして見ていた。二人で進められたので、進行しやすく、子どもの様子など多面的に捉えられた。

d) 4年「ごめんねbingo」

【感想】

- ・自分からごめんと言ったら心がスッキリするし、相手もスッキリすることがわかった。心がいやされて、心の傷がなあってその子と仲良くなれる。
- ・心を込めて謝ったらみんなスッキリできる。
- ・ちゃんとあやまらないとケンカが起きたり、相手も自分もイライラする。
- ・あやまってくれてうれしかった。ごめんなと言ったら、すぐに仲直りができると思った。
- ・ずいぶん前のこと、あやまってくれるとスッキリする。
- ・あやまるのは勇気がいるが、どんなに大切か分かった。

4年生は、ちょっとした誤解や些細なもめ事が起きたとき、素直に謝れなくて仲間関係がぎくしゃくしてしまう場面が見られたが「ごめんねbingo」で気持ちを込めて謝ってもらうと気持ちがスッキリすることや、お互いの関係がより良くなるということを学んだ。

e) 5年生「冒険あいあい」

【感想】

- ・みんなすごくがんばってくれていて、Aさんが「こんな案で毒の川をわたろうや。」といい案をだしてくれて、それに対して一生けんめい取り組んでくれて、一番に毒の川をわたれた。
- ・男・女かんけいなく服をつかんでいた。力をあわせてがんばっていた。
- ・班のみんなで川をわたるとき協力できた。はん長がみんなを集合させたりしていた。
- ・すごく楽しくてみんなが一つにまとまれていた。一人一人の意見を大切にして、そしてその一人一人の意見を生かして、そしてみんなで一生けんめいそれに対して取り組んでいくのが、すごくうれしくて自信が持てた。
- ・意外と川を渡るのが難しかったけど楽しかった。他の班の人が最後まで応援してくれて嬉しかった。
- ・班でどういうふうにしたら進むかわからなかつたけど、何回も何回もやりなおすとできた。

班で協力して課題に取り組む楽しさや達成感を味わうことができたプログラムであった。「場づくり」を工夫することで、ワークに臨場感ができ、子どもたちは大変興味を持って取り組むことが出来た。

f) 6年生「ストレスマネジメント」

【感想】

- ・友だちとの約束を破ったら、その友だちがどんだけ傷つくかが、すごくわかった。
- ・ちょっと言い方を変えたりすれば、ケンカにならないということが、わかった。
- ・相手の事情とかを聞いたりしてから、言ったりしないと相手の事情を知らずに、相手が悪いみたいな言い方をするのは、よくないと思った。
- ・ロールプレイングで考えてみると、楽しくてわかりやすかった。
- ・グチられた友だちも、理由も知らずに一緒になって、悪口言うんじゃなくて、友だちやったら、そうなってしまった理由を聞いて、仲直りできるようにアドバイスするべきやと思う。
- ・今度からちょっと言い方をかえて、相手を傷つけないようにしようと思った。
- ・理由も知らないのに一人で怒ったりしないでちゃんと相手の気持ちをわかって行動しようと思った。

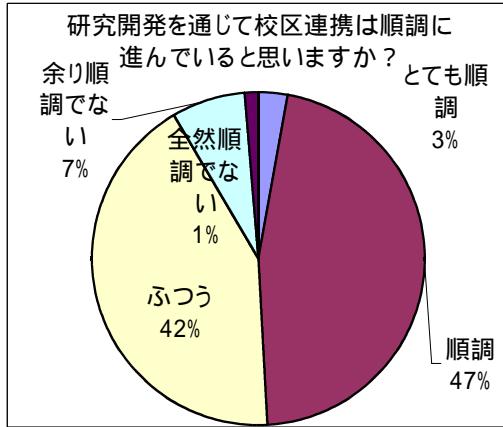
ロールプレイも取り入れることにより、友だちとの関わり方を客観的に考えることが出来た。ふりかえりから、学んだこと、感じたことを次時の導入に使うことで、「気づき」を共有することが出来た。

2. 教員のアンケートから

七中校区での研究開発の初年度にあたり、校区の教職員からアンケートをとった。それをもとにして校区研究開発企画委員会で総括をし、次の点にまとめた。

- ・松原第七中学校区の地域教育協議会の予算総会で、校区で進めている人間関係づくりトレーニングの内容を地域の方々に理解していただくために、校区の幼・小・中の教職員が一緒になって、ロールプレイ（劇）に取り組んだ。
- ・春の松原第七中学校区人権教育研究会（校区人研）で、幼・小・中の校区あいあいプロジェクト（校区あいプロ）で、指導案を検討し、恵我小学校で公開授業を行った。秋の校区人研では、松原第七中学校で、校区の幼・小・中の園児・児童・生徒を一堂に会し、公開授業を行った。指導案の検討を校区あいプロで行った。この実践を通して、校区の幼・小・中の教職員の連携が深まった。

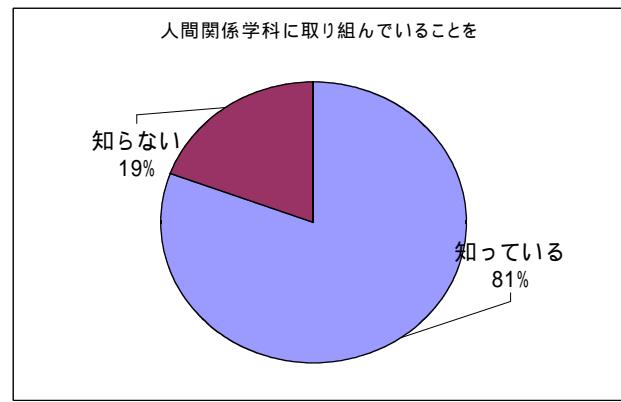
- ・校内研修・校区合同研修などをふまえ、松原第七中学校の人間関係学科（H R S）の実践の積み上げのもと、小学校もプログラムを作成することができた。
- ・この取組では、子ども達の人間関係をよくするだけでなく、教師が子どもの見方やとらえ方、接し方などをどのようにすればいいか集団づくりにもつなげられる課題である。



教師のアンケートから

- ・足りないところはたくさんあると思いますが、1年目で校区人研で4校園でできたことや、校区で研究開発ができるなど進むことができた。
- ・以前より、小学校、幼稚園の先生方との連携度（連絡の密度）が高まっているような気がするから。
- ・話す機会がふえたのはよいと思います。
- ・あいあいプロジェクトや校区人研等、校区全体で取り組む機会は増えており、教員間の意思疎通は進んでいると思う。
- ・仲良くなる1年目でよいのではないでしょうか。小学校の先生方の顔が知れただけでもOKでは？あいさつも出来るようになりました。
- ・これからも深まる余地はあると思いますが、校区人研などでどんどん進んでいくと思うので、共通の課題を前にして、協力しつつ解決にあたっているので会などで話す機会がふえたのはよいと思います。
- ・あいプロや校区人研等、校区全体で取り組む機会は増えており、教員間の意思疎通は少しずつ進んでいると思う。

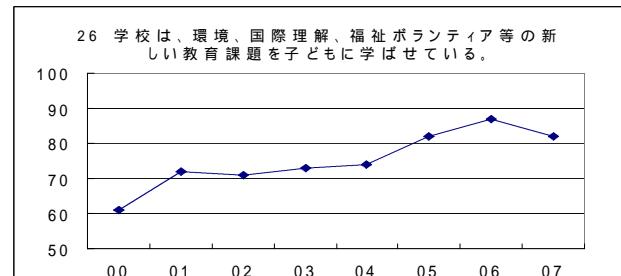
3. 保護者のアンケートから



上のグラフは、人間関係学科の認知度を表しているが、81%の保護者が人間関係学科に取り組んでいることを「知っている」と答えている。

校区にむけては七中校区地域教育協議会の本年度の予算総会において、幼稚園・小学校・中学校の教員によるロールプレイに取り組み、人間関係学科（H R S・あいあいタイム）の情報発信を地域にむけて行った。小学校・中学校では、保護者の授業参観にH R Sの授業を実施したり、中学校では参観後の懇談会でワークを披露した学年もあった。

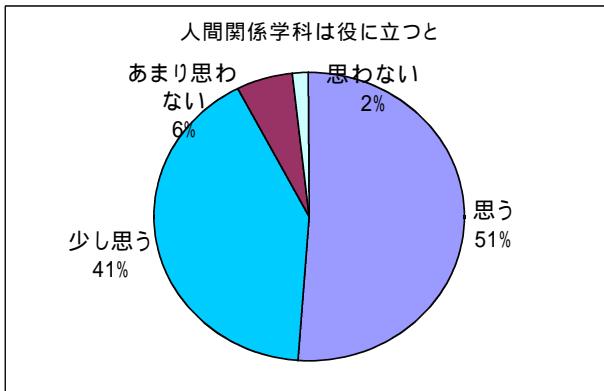
このグラフは七中において毎年実施している学校教育自己診断（保護者向け）における「学校は、



環境、国際理解、福祉ボランティア等の新しい教育課題を子どもに学ばせている」の項目の推移である。小学校においても同じアンケートにある「学校は豊かな心をもった子どもを育てようとしている」の項目で74%の数値に達している。

次のグラフは、「人間関係学科は役に立つと思うか」という問い合わせに対するグラフである。今の子どもたちにとって身につけるべき力を学べる時間と

しての期待が強いのではないだろうか。実際の保護者の声をいくつか紹介しておく。



- ・人との関わりは、直接相手と話すことによって理解しあえるということを、子どもに指導していって頂きたいです。子どものころから、携帯メールやパソコンでのメールのやりとりを中心とした人間関係では、バーチャルな世界で生きていくことになりかねません。(大人になったときに)
- ・一人の心ない言葉や態度で「キズ」つくことがあります。どんなに忙しくてもどんなにいやであっても相手に対して誠実に心を込めて応対の出来る、お互いが謙虚な態度で接していく、そんな人間関係を結べるような子どもに育っていくよう、これからもたくさんアドバイスしていって頂けたらと思います。(もちろん家でも教えています！！)
- ・いつ、どんな所でも自分の意見が言え、相手の意見が聞けるような関係、相手の気持ちになって行動ができるように。
- ・先日の参観で初めて「あいあいタイム」という授業をしているのを知りました。学校通信などで年間通しての内容やスケジュール、目的といったものを知らせてもらえたうれしいです。
- ・大人でもコントロール(気持ちを)することが難しいことで、少しでも人の気持ちを考えながら成長できる時間になればよいと思ってます。
- ・今の子どもたちは、親をはじめ、まわりの大人たちが良かれと先々に何でもレールを引いてあげているので、自分で考えて行動することや、友だちの接し方などが難しいように見えます。生活の中で色々経験し、自分でやってみる、考えてみるという力をのばせるようにご指導いただけたらな、と思います。
- ・もっと授業数を増やせるものなら増やして欲しいと思うくらい、大切な授業だと思います。「個性を認め合う力」や「人生の中では色々な選択肢がある事」や、「逃げる、避ける事も選択肢

の一つ」等、いろんな方向からいろんな見方、考え方がある事をたくさん教えてあげて欲しいです。

- ・上の子が七中に通っていた時にも何度も人間関係学科の授業を参観しました。今の時代、こんな事まで学校で教えなければならないのかと驚くと同時に、これから生きていく上でとても大切な事ばかりなので、積極的に取り組んでほしいと思います。
- ・本来であれば家庭で試されるべき事を学校でしてもらわないといけないのは残念。親がもっと学ばなくてはいけないと思います。子どもは家庭を映し出す鏡のようなもの。親にも色々な意見なり要望を発信していって下さい。
- ・子どもから人間関係学科の授業が楽しみだと聞いています。これからも楽しみながら真剣に取り組めるよう、永く続けていってほしいです。